
怖い話1

あてな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い話1

【Nコード】

N7344K

【作者名】

あてな

【あらすじ】

体中に突起が出来た人の話

怖い話1（前書き）

色んな怖い話を書いていこうかと思うんですが、でも怖くないかもしれないんです。

怖い話1

「暑い……」

それもそのはず、今日は気温が40度もあるのだ。

そんな炎天下の中、俺は夏休みを使って、
近くの山に山登りに来ていた。

電車でこれるような近くの山だ。
とはいっても、山頂まで登るわけじゃない。
近所の山に遊びに来たという感じのものだ。

セミの泣き声が延々と続く中、黙々と歩き続ける俺は、
喉が渴いたので、背負っていた普通のリュックを降ろし、
中から水筒を取り出した。

「どこか座れるところはないかなあ……」

こんな山の中だ。ベンチなんてあるわけがない。
俺は近くの大きな木のふもとに座り、一服する事にした。

やはり運動不足な自分の体では、山登りはきついのだろう。
しかし日ごろの運動不足を解消するためにも、一応はやり遂げる事
にした。

「ふう……」

そんな事を考えてる内に、水筒の中身を半分程飲み干した。

「しかし、都会のゴタゴタした場所とは大違いだな……」

静かな森林を見て俺は思った。

もう、都会に住んで5年にはなるだろう。

昔は実家暮らしだったが、上京して都会に住み始めると、やはり都会の便利さに負けてしまい、

都会の方が居心地が良い事を知ってしまったのだ。

田舎の静かな感じも良いが、やはり生活していくとなると、便利の方が良いのである。

「さて、そろそろ行くか」

水筒をリュックに入れて背負い、俺はまた歩き続ける事にした。ふと時計を見ると12時を回っていた。

そろそろ下山し始めた方がいいと思い、来た道を戻る事にし、足を動かした。

下りはついつい足が速くなってしまふ。

怪我をしないように気をつけながら、山を下っていく。しかし注意はしたが、つい転んでしまった。

「いてえ……」

ドサっという大きな音を立てながら、

前にスライディングするような形で転んでしまった。

「うわ……背中擦り剥いちゃった……」

背中を触って見ると小さな擦り傷が出来ていた。

しかし消毒液や絆創膏なんて持ち合わせていなかったの、そのまま放置する事にしたのだ。

注意していたにも関わらず怪我をしてしまったので、さらに注意をしながらゆっくり下ることにした。まだ12時なので、3時頃にはふもとに着くだろう。

その後は何事も無くふもとについた。

しかしその頃には擦り剥いたことなんて頭には無かった。ようやくふもとに着いた俺は、そのまま電車に乗って家に帰る事にした。

家に着いた頃には空は真っ暗になっていた。

俺は疲れきった体で玄関のドアを開けると、誰も居ない家にただいまをし、電気をつけ、風呂に入る準備をした。

「今日は疲れたなあ……」

明日はきつと筋肉痛だろう。それ程歩いたのだから。

テレビを見たりしながら風呂が沸けるのを待つこと数十分、そろそろかと思ひ浴室へ移動した。

「よし、沸いたな」

沸けた事を確認すると俺は風呂に入る事にした。

「はあ……」

やはり風呂は最高だ。一日の疲れが無くなるのが分かる。

その時俺は、背中にかすかなかゆみを感じる事に気づいた。

「なんか、背中が痒いな……」

仕方がないので少し掻く事にした。

とりあえず掻くとかゆみは引き、少し経つと何事もなかったかのよう
うに、

かゆみは消えた。

「さて、そろそろ出るかな」

俺は風呂から出てシャワーを少し浴び、浴室から出る事にした。

風呂から上がった後は食事を済まし、そのまま布団の中に入る事
にした。

体は疲れきっていたので、ぐっすり寝れそうだった。

俺は万年床の布団に入ると、数分経つ頃には既に夢の中だった。

翌日

今日はバイトの日だ。

なんとか起きた頃には既に11時を回っていた。

昨日はかなり疲れていたのか10時間も寝てしまった。

バイトは12時出勤なので、結構危ない。

「やべ……こりゃ朝飯抜きだな……」

急いで浴室に向かった俺は歯磨きをしてるとあることに気づいた。

「うつん……？」

また背中が痒いのだ。

なんとなく掻いてるとある事に気づく。

「なんだこりゃ……？」

背中に何か突起のようなものが出来てるのに気づく。
だが、時計を見ると11時20分になっていた。

「やべ！ 時間がやばいんだった！ 急がないと！」

俺は背中 of 異常なんて忘れてしまい、さっさと歯磨きを済まし、
急いで家から出る事にした。

「おい村上！ 何をボケつとしてるんだ！」

「すいません！ 気をつけます！」

バイト中ボーつとしてた俺は店長に起こられた。
仕方なく俺は店長に謝った。

しかし歯磨きの時に気づいた背中の突起のことが
妙に気になるのだ。

「明日病院に行けばいいか……」

しかしこの突起には、痛みもなく、時々痒いくらいなので、
あまり危機感を感じなかった。

バイトが終わった俺はそのまま真っすぐ家に帰り、
パソコンを点け、背中にある突起の事を調べることにした。

「検索結果、無し」

「ええ……？ まあ病院に行けばいいか……」

がっかりした俺は風呂と食事をすまし、そのまま寝る事にした。

翌日

起きたのは12時、既にお昼だ。

「あれえ？ なんで俺こんなに寝てるんだ……？」

昨日からなぜか長く寝てしまう。

とりあえず起きた俺は、歯磨きをしにいった。

「うわああああ！」

鏡を見た俺は、鏡に映った自分を見て、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「なんだよこれ……」

鏡に映っている俺の顔は、カビ色をした突起が10個程できていたのだ。

「気持ちわりい……」

あまりの気持ち悪さに、俺は急いで浴室から出る事にした。

「とにかく病院に行こう……これは何かの病気だ……」

そんなことを考えていると、また背中にかゆみを感じた。背中に手を当ててみると、そこには自分の皮膚とは違う感触があった。

「なんなんだよもう……！」

背中から腰にかけて、大量の突起が出来ていたのだ。

俺は自分の体がおかしくなってしまったという現実を突きつけられて、

少し気が変になってしまったみたいだ。

「全部切つてやる……」

そうだ切つてしまえば良いんだ。

切つてしまえばこの気持ち悪いものから逃れられる。

俺は台所に向かうと、置いてあった包丁を手に取り服を脱いだ。

服を脱いで気づいたが、お腹の方にもカビ色の突起が沢山出来ていた。

俺は身震いしながら包丁を顔の突起に当てた。

「いてえ……」

包丁を突起に当てて切ろうとすると、痛みを感じた。

この突起には神経でもあるのか？

そんなことを考えながら俺は突起を切り取り続けた。

切った跡からは血が沢山出ていた。

ようやく突起を3個程取る頃には、凄まじい激痛を感じていた。

「やっぱり病院に行ったほうが良いのかな……」

激しい痛みの中、俺はそんな事を考えていた。

しかしこんな醜い顔で外に出るのは、

後々後ろ指差される事になりそうで、あまり部屋から出る気がしなかった。

「とりあえず、血を止めよう……」

突起を切った跡の所に、俺はティッシュを何枚が取り、当て続けた。

1時間程経った頃だろうか、ようやく血が止まったようだ。

痛みはまだ治まらないが、

喉の渴きを感じたので、冷蔵庫の前まで歩いた。

血が減ってしまったのか、少しくラクラしてしまふ。

冷蔵庫を開けた俺は、中にあったペットボトルに入っている水を取り、

喉を鳴らしながらゴクゴクと半分程飲んだ。

水を飲んで少し落ち着いた俺は、病院に電話をすることにした。

「あれ……？」

なぜかその時は電話が通じなかった。

実際は話中だったのだが、その時の俺は酷く落胆してしまい。

話中という事を考えなかった。

気づいた頃にはもう夜の11時だった。

眠気と痛みを感じつつ俺は布団に入る事にした。

翌日

「うう……」

激しい痛みとかゆみで俺は起こされた。

お腹と背中が非常に痒く、顔は依然として痛みは続いている。

「ん……？」

仕方ないので背中 of 突起を掻いていた俺はある事に気づいた。

「まさか……口の中にもできてるのか……？」

舌を動かして口の中を確認める。

あった。そこに7個ほどの突起があったのだ。

「マジかよ……」

俺はもう、どうしてこんな事になってしまったのか、凄く後悔した。それに、なぜか少し苦しい。

鼻の中にも出来ているようだ。

突起のせいで空気の通りが悪い。

もう俺は布団の上から動く気もなかった。

こんな気持ち悪い自分の体は嫌だ。

そんなことを考えていた。

翌日

「うう……」

自分のうめき声が部屋に響いた。
既に突起は体中に出来ていた。
舌には大量の突起が出来ており、喋る事もままならない。

そんな時電話が響いた。

しかし俺は電話を取る気力は無く、
そのまま放置していると留守電になったようだ。

「おい村上！ 今日バイトなのに何やってんだ！ 早く来い！」

店長だった。

だがそんなことはどうでもいい。

俺はもう外に出る気は全く無かった。
このまま死んでしまいたい気分だ。

翌日

俺は息が出来なくて苦しかった。

喉にも出来ているのだろうか。息が苦しい。

「このまま息が出来なくなれば、楽になれるのかな……」

未だに全身には物凄い痒みが続いていた。

掻いても掻いても痒いので、いつの間にか掻く事はやめていた。
既に視界は真っ暗で、瞼を空けても突起のせいで何も見えない。

意識が朦朧としてきた。

（うう……なんなんだよ……俺が何したってんだよ……）

俺は朦朧としていく意識の中でそんな事を考えていた。
死んでしまえば、この痒みから開放されるのだ。
死んでしまえば、この気持ち悪い突起から開放されるのだ。

ついに息が出来なくなった。

そんな時急に山登りの事を思い出した。

（もしかして……あの時転んだせいかな……）

そんなことを思う前に俺は、既にこの世には居なかった。

数日後

村上の死体はバイト先の店長によって発見された。

その時店長には、それが人には見えなかったという。

店長が言うには

「最初に見た時には死体とは思いませんでした……」。

何度か見直してみるとようやく村上さんと分かったくらいで……。

「

なぜならそこには大きな木のようなものがあつたのだから。

その後店長は警察に連絡し、村上の死体が発見される事になった。

死因は「HPV」というウイルスだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344k/>

怖い話1

2010年10月21日20時37分発行